

Latvija

日本ラトビア音楽協会ニュース

第8号
(2007年7月10日発行)

日本ラトビア音楽協会事務局

〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者

加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
Tel 090-7014-0002
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp
kato@heisei-business.co.jp

編集代表者

徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

天皇皇后両陛下、初のラトビア訪問

友好の絆一気に強まる

天皇皇后両陛下は5月21日から10日間、スウェーデン、エストニア、ラトビア、リトアニア、イギリスの各国を訪問された。旧ソ連圏のバルト三国訪問は初めてで、出発前に天皇は「半世紀にわたった旧ソ連時代を経て独立し、日本との友好関係は着実に成長している」と述べられた。皇后も1週前の会見で「バルト3国独立のニュースは今でも鮮明に覚えている」と感想を語られた。

通商航海条約を結んだ1928年以来、形の上では友好関係が続いていた両国が、一気に友好の絆を強めることになった。

音楽を通じて日本とラトビアの友好推進に努力を続ける我々にとっても、両陛下初のラトビアご訪問は最高に嬉しい出来事で、現地から届く情報を克明に追った。リガ在住の当協会会員、エドガルス・カッタイさん、黒澤歩さんが、両陛下とコミュニケーションを深める面で大きな役割を果たされ、その感想をお寄せ頂いた(別掲)。

◇

両陛下は5月25日12時、前訪問地エストニアから日本政府専用飛行機でリガ国際空港に到着され、ヴァイラ=ヴィーチェ・フレイベルグ大統領と夫のイマンツ・フレイベルグス氏が出迎えた。

両陛下は12時20分、リガ城(大統領官邸)で公式歓迎セレモニーに臨み、紋章の間でゲストブックに記帳。13時、自由の記念碑に献花。ここでは1000人を超す市民に拍手で迎えられ、彼らに優しく声をかけられた。フレイベルグ大統領は両陛下の訪ラトビアを記念し、叙事詩ラチュブレシスの日本語訳とゴブラン織り、そしてオレグス・アウセルス制作の銀製の桜の枝を贈呈した。

13時40分から大統領主催の昼食会が行われた。ヴィネッタ・ムイズニエツェ国会議長、アイヴァルス・カルヴィーティス首相、アルティス・パブリクス外相ら要人が全て参加し、もちろんペーテリス・ヴァイヴァルス在日大使も出席された。席上陛下は「(両国の友好関係が)第2次世界大戦とその後の歴史の展開の中で閉ざされたことは誠に残念なことでありましたが、再び友好の関

係が発展しつつあるのは喜ばしい。ラトビアの人々が、勇気と誇りをもって困難に立ち向かってきた歴史を私どもは忘れてはならないと思います」と挨拶された。

さらに両陛下は15時半から30分、リガ市内の「占領博物館」を見学された。ナチス・ドイツ占領時代と旧ソ連の支配下にあった、ラトビア人の苦難の歴史を語る展示の数々を、熱心に見て廻られた。

天皇皇后両陛下のラトヴィア御訪問

ラトヴィア・リーガ在住 黒沢 歩

5月25日、30度を越すような炎天下の正午、リーガ空港から直行した車を大統領官邸のあるリーガ城前で両陛下が降りたとき、頭上を白い鳩が飛び去ったそうです。それから大統領ご夫妻とのご歓談は弾んだ様子。というのは、次の献花式が予定されていた自由の記念碑前で待つ宮内庁と外務省のスタッフ、通訳の私も、沿道で待ち構える市民と同様に30分以上も待ったからです。私のつま先は履き慣れないパンプスの中で燃えるようでした。ご到着後、天皇陛下は大統領と軍の吹奏楽団による演奏の中を進まれて献花した後で、沿道の大勢の人や在留邦人にお声をお掛けになりました。

大統領主催の午餐会は、ブラックヘッドの館にて行われました。閣僚と国家要人のほか、日本に縁のある方々が揃いました。そこに私も招かれていたので、自由の記念碑前から5分で移動するのが大変でした。午餐会では、大統領がラトビアと日本との豊かな交流につきお話しになり、天皇陛下はラトビアの歴史に触れながら独立回復後の繁栄を讃えました。大統領ご用達のリーティンシュ・シェフはカマスと鶏肉料理を用意し、日本から運ばれてきたマツタケに舌鼓を打ちました。

引き続き占領博物館をご見学になり、一連の外国要人を迎えるラトヴィア側プログラムが終わると、夕方に組み込まれたのが日本研究者・日本語学習者との交流です。大学生が日本語を初めて実践で使った相手が天皇皇后とは、まったくこれ以上の刺激があるでしょうか。

ラトヴィア大学をご訪問した天皇皇后両陛下に、日本学コースの二人の学生代表(男女それぞれ20歳)が



自由記念碑前でリーガ市民に手を振る天皇皇后両陛下(撮影:橋本沙里)

18時15分、両陛下はラトビア大学を訪問、リガ大聖堂少年合唱団の素晴らしい歌で出迎えを受けた。ここ

日本語でした発表は次のようなものです。私たち講師が率先して二か月前から学生のアイデアを募って準備した発表の内容が、今度ご訪問にてラトヴィアの歴史に触れた天皇陛下のお話と偶然にもよく呼応したものとなりました。

こんにちは! 私たちはラトヴィア大学アジア学科を代表してラトヴィアの国の歴史についてお話したいと思います。民族の心がどう変わったのかを、詩を用いて表現したいと思います。まず、古い子守唄を歌いますのでお聞きください。

揺り籠よ 揺れよ
坊やが元気に育つように

主人は兵士を待ち望んでいる
父と母は畑の耕し手を待ち望んでいる

この子守唄は、両親が心配する心を歌っています。昔、戦争が多かった時代に、ラトヴィア人の農民は戦に駆りだされました。そのため、若者の母親は悲しみました。息子が戦場で死んでしまったら、誰がこの家を守っていくのか、と悩みました。当時、人々は家族のことだけを心配しましたが、今では人々は民族全体のことも考えるようになりました。ラトヴィアの歴史は辛い時代がありましたが、ラトヴィア民族は今、誇りと幸福を感じています。

次は現代詩です。この詩にはラトヴィア民族と自然の関係がよく表れています。前述の子守唄に比べて、ここでは喜びの気持ちがよく見られます。「白樺」という詩です。

我が大地の良き暮らし
他にどこにあるだろう
山を越えてやってきたのは
木皮の長靴を履いた白樺だ
堂々と誇り高く
胸を高く張っている

では現代言語学部東洋学科の日本学学生ら(日本人学生も含む)と対面、「日本語を勉強し、日本とラトビアとの理解と友好関係が増進されるよう祈っています」と挨拶された。詳細はその場におられたカッタイさん、黒澤さんのレポートを参照ください。

両陛下一行は翌日10時20分、次の訪問国リトアニアに向かわれた。僅か22時間の滞在ながら、限りなく価値ある足跡を残された。

地理的には日本から遠い遠い国ラトビアが、両国の人々のハートの面で一気に近くなった。(徳)



天皇とフレイベルグ大統領談笑の通訳する筆者(中央)

白樺がこんなに白いは
ほかに比べようもない誇らしさ
すると我も誇りを持つ
いずこも誇りに満ち溢れている
のはなぜか。

「お前のお陰さ」と言う白樺に
我は答える「貴方のお陰です」

自分のことを誇りとする白樺の気持ち人がにも影響を与えます。民族と自然は互いに欠かせない存在なのです。白樺は独立を回復したラトヴィアを象徴しています。辛い時代も良き時代も含め、歴史があってこそ現在の私たちがいます。過去を忘れず、誇りを持って将来に向かっていきたいと思っています。

子守唄は詩と共に言語で歌われ、その清らかな響きが多忙な日程の中でも天皇皇后両陛下のお心に響いたであろうと期待せずにはいられません。ラトヴィアご滞在はほんの一日ではありましたが、それはメディアがこぞって日本に強い関心を示し、ラトヴィアにおける日本が脚光を浴びた一瞬でした。日は過ぎて、ラトヴィアではすでに新しい大統領が就任しようとしています。ひとつの時代が閉じようとする真夏日のリーガより。

パブリクス・ラトビア外務大臣夫妻来日

大使館で心のこもったレセプション開く(6月10日)

加藤専務理事に感謝状贈呈

天皇皇后のラトビア共和国訪問で、急速に両国の親密化が深まっているが、6月上旬、アルティス・パブリクス外務大臣夫妻が来日し関係方面に深い謝意を表した。さらに、帰国前日の6月10日、大使館の披露を兼ねてレセプションが開かれ、約70名が招かれた。とりわけ当協会関係者が多く、当協会活動への高い評価と感謝の気持ちがにじみ出ている。

当日は午前中、豪雨が降り続いて心配したが、開会の午後3時にはカラリと上がり薄日さえ漏れた。大使館の心がけが良いのか、招かれた者が徹底的な晴れ人間なのか…。いずれにしても、両者の良好な関係が象徴されている気がした。

入り口で外相夫妻、ヴァイヴァルス大使、案内役の田中享大使館顧問(前駐ラトビア日本臨時大使)が出迎え、一人一人と両手で暖かい握手をして挨拶を交わした。大臣は若々しくて、ダンディーでクレバーな青年というイメージ。真っ赤なドレスに身を包んだ夫人は、ファッション誌から抜け出たような飛び切りの美人で、握手をされて全身がピリッとした。

大臣は冒頭に「親愛なるラトビアの友人」という言葉からスピーチを始めた。「今日は両国の交流に尽力して頂いた皆さんへの感謝の会。友情は人間性の最も大事な部分です。5月25日に天皇皇后がご訪問される栄に浴した。日本とラトビアの友情をもっと深まるよう心から願っている。日ラ音楽協会が大使館開設前から存在して、様々な活動をされていたことに感謝したい。音楽・文化を通じた人と人の交流は、政治とは違った面で大きな意味を持つ。今日は特に音楽協会の皆様に深い感謝を捧げたい」と話した。



アルティス・パブリクス外務大臣夫妻とヴァイヴァルス駐日大使(左)



外務大臣から加藤晴生専務理事に感謝状が贈呈された



入り口で一人一人と挨拶を交わす大臣夫妻と大使

ここで予期せぬ発表があった。「10年以上も日本とラトビアの文化交流に貢献されたミスター・カトウに、ラトビア共和国から深い感謝の意を表したい。」と、外務大臣の公私二通りの直筆サインが入った感謝状が加藤晴生専務理事に手渡された。

加藤専務理事は大使の勧めを受け、戸惑いながら、「1993年、稲門グリーが演奏旅行に出かけた時に始まったラトビアとの係わり合い」を振り返り、「協会会員全員及び妻と喜びを分かち合いたい」と謝辞を述べた。「バルトか、ニューヨーク・カーネギーホールか、という選択の中で、独立を果たした早々のパッション・エネルギーに直接触れたい、と全員の意見が一致した。05年に早稲田大学グリークラブがラトビアで演奏会を開いた時のキャッチフレー

ラトビア歴史に未曾有な燦爛たる一頁!

エドガルス・カッタイ

2007・5・30 於リーガ市

平成19年5月25日午前中、鮮やかな赤い色の文字「Japan」で飾られた真っ白い大型飛行機が無事にリーガ空港に着陸しました。天皇・皇后両陛下のラトビア御訪問が始まりました。



公式歓迎式はリーガ城(大統領官邸)前の広場で行われました。ラトビア大統領をはじめ、総理大臣、政府要因、社会活動家らが揃って出迎えました。

官邸内で我が国大統領は天皇陛下に勲一等三星章を贈呈し、記念品として当地の有名な宝石工Auzers氏の手作りの銀製で優美な「桜の小枝」を差し上げました。そして、リーガ中心地にある自由記念碑の下で献花式があり、周囲に立っていた数百人の一般市民が熱烈に拍手して、両陛下に深く敬意を表しました。

その後、ラトビア国大統領主催のレセプションが市役所広場の「ブラック・ヘッドの館」で行われました。大統領は演説で、芸術・スポーツ・貿易などの面で日本とラトビアの交流について御説明致しました。「君が代」が厳かに響き、天皇陛下が演説で主として日本・ラトビア両国間の外交関係の

順調な発展を強調されました。最後にラトビア国歌が演奏されました。

同日午後六時からラトビア大学本館は緊張した雰囲気支配していました。両陛下が日本語教育の御視察をなさいますからです。最初は市立文化学校日本語班及びラトビア大学日本語科の学生が、前もってよく準備された御挨拶、詩の朗読があり、両陛下との応答が始まりました。天皇陛下の御質問は明瞭簡潔で、発音もとてもはっきりとされており、高校生がよく理解して十分な話し合いができたと思います。

皇后陛下はリーガ市で働いている日本語教師(高校の小柳さん、ラ大の黒沢歩さん、橋本沙里さん、イルゼ・パエグレさん、イリーナ・ベスルチェンコさん=四人とも女性)及び私と、日本語を教える体験について親切にお話しされました。これは誠に一生忘れられない感激の懇談会でした。

翌朝両陛下は、空路で隣国リトアニアへ向かわれました。



天皇皇后両陛下とフレイベルグ大統領夫妻

ズ「TIK TALU-TIK TUVU」(遠くに住んでいても心は一つ)を改めて噛み締めたい」とという言葉に大臣も大きく頷いていた。加藤専務理事はこれまで15回もラトビアを訪問している。和やかな談笑が続く中、筆者は外務大臣に天皇皇后の印象を聞いた。「出迎えから見送りまで終始同行させていたのだが、両国の交流に本当

に大きな役割りを果たされた。一口で言えばとてもヒューマンな方です。市民にまで絶えず微笑みを投げかけ、握手を交わされる姿に感動しました。高貴な育ちの方にはなかなか出来ないことです」と、その温かい人柄を絶賛された。

日本とラトビアが本当に近くなったことを実感したひと時だった。(徳)

沖縄に名誉領事館開設

空手家・翁長良光氏が名誉領事就任

ラトビア共和国大使館は3月22日、沖縄県那覇市に名誉領事館を開設し、同市在住の空手家翁長良光氏(68歳)を名誉領事に任命した。

領事館は専門学校国際コミュニケーションカレッジ内に設置された。

任命式に出席したヴァイヴァルス

大使は「沖縄とラトビアの友好を一層促進してほしい」と大きな期待を寄せた。大使館によると、名誉領事館開設は那覇が第一号で、近く北海道、大阪、九州にも開設予定だという。

翁長新名誉領事は世界各国に弟子を持つ空手家で、空手指導で何度もラトビアを訪れたことが縁になった。

同領事館の開館時間は、平日午前10時から12時、午後2時から4時。

特別寄稿

天皇皇后両陛下
「世紀のラトビアご訪問」

5月25日、天皇皇后両陛下は歴史上初めてラトビアを親善訪問されました。これはラトビアにとって「世紀のご訪問」となりました。ご訪問の様子は、これまで断片的にTVニュースで放映されてきましたが、6月24日午前5時30分よりフジ・テレビで「皇室ご一家」ラトビア総編集が放映されました。本稿ではTV放映やご日程をもとに概要を少しご紹介してみたいと存じます。

同番組では、冒頭、ラトビアはスウェーデン、エストニアに次ぐ3番目の訪問であり、「バルトのパリ」として知られていると紹介されました。

5月25日正午、リガ国際空港でヴィーチェ・フレイベルグ大統領夫妻が両陛下をお出迎えました。同12時20分より、歓迎式典が大統領官邸リガ城の前においてとりおこなわれました。会場には赤いじゅうたんが敷かれ、ラトビアが最高の礼をもって両陛下をお迎えする様子が写されていました。その後自由の記念塔において、天皇陛下は大統領とともに献花を行われました。

次いでブラックヘッドの館において、大統領主催による天皇皇后両陛下に対する午餐会が催されました。ブラックヘッド・ギルドの館はハンザ同盟が殷賑を極めたときに組織された青年商工会議に相当するギルド組織ですが、第二次大戦で破壊されたあと再建された優雅な建物は現在でもリガでは最高の歓迎式典の会場



となっています。

大統領はスピーチの中で、日本からの歌の祭典へ参加、百万本のバラ、ラトビア音楽学院、アベ・ソル、ジントルス、ラトビア放送合唱団、コクネセ・シベリア抑留者慰霊公園の設計コンクールに榊野俊明氏が優勝したことなど多彩な交流が始まっていることを高く評価しつつ、ラトビアと日本は大自然に対して尊敬の念を持っている点で共通点があると述べました。最後に今後ますます両国の関係が発展することを希望すると締めくくりました。これに対して天皇陛下は、今後一層両国の友好親善と相互理解が進展することを希望しますと述べられました。

引き続き午後3時35分より、天皇皇后両陛下は隣にある占領博物館を訪問されました。ラトビアは、第2次大戦の前後に、ナチス・ドイツとソ連によって占領されていましたが、同博物館はそのときのラトビアの苦難の歴史を展示しているところです。また同博物館ではスターリンにより推定60万人がシベリアや中央アジアに送られた歴史が展示されています。その際ラトビアの人々が、シベリアや中央アジアなどに抑留された日本人の人々と接触があったことを示す手紙やこけし、眼鏡などが展示されました。両陛下は特別の関心を示され

ガラス・ケースの中の手紙をお読みになっておられる姿が印象的でした。

その後、天皇皇后両陛下はラトビア大学を訪問されました。同大学では、学長の案内により児童合唱団の合唱を聞かれた後、東洋学部代表や学生からの挨拶を受けられました。TVではこの部分は放送されませんでした。

両陛下はこれにてラトビアでの公式行事を無事すべて終了され、宿舎のラデソンSASホテルに到着されました。そして翌5月26日10時過ぎに宿舎をお立ちになられ、午前10時30分、パブリクス外務大臣夫妻のお見送りを受け、リガ国際空港を次の訪問国リトアニアに向けて、ご出発されました。

ラトビアでは、大統領の空港出迎え、歓迎式典、自由の記念塔献花、大統領午餐会は国賓に対する待遇とされているようですが、今回ラトビア側はそれ以上のおもてなしに徹し、官民をあげて心から大歓迎している様子がよく表れていました。現地にいるドイツ人の友人からは、ラトビア人がこんなに日本好きだとは知らなかった、ご訪問は大成功だったと伝えてきました。

このようにして、天皇皇后両陛下のラトビアを含むバルト3国への歴史的なご訪問は、日本とこれら諸国との友好親善関係が新たな高い次元に到達したことを象徴するものといえましょう。(ST記)



おめでとうございます

田中亨氏がラトビア共和国から最高荣誉「三星章」受賞

ラトビア共和国アルティス・パブリクス外務大臣は6月5日、沖縄県那覇で開催された



同国沖縄(那覇)名誉総領事館開会式と同じ日の夕刻、田中亨前駐ラトビア共和国臨時代理大使(現ラトビア大使館顧問、当協会会員)に同国最高の勲章「三星章」を授与した。ラトビア在任中から現在に至るまで、ラ・日間の交流・友好促進に尽力を続ける数々の功績を高く評価された。ラトビア駐在臨時代理大使に同章を授与されるのは同氏が初。田中氏はラトビア在任中から当協会事業を様々な場面で支援され、このLatvija紙にも何度かご寄稿頂いた。帰国後はラトビア大使館から顧問就任を要請された。当協会にも入会され、弊紙にも常に貴重な情報を提供して頂いている。明るい人柄と、溢れるような幅広い知識、識見、巧みな話術に、いつも驚嘆させられる。6月10日に開催された外務大臣セッションでも見事に案内役を果たされていた。弊紙からも祝意を申し上げたが「イヤイヤ、穴があったら入りたい」と大テレされた。こんなシャイな一面も持つ日本のエリートだが、今回の受賞を期に、ますます両国の親善促進に活躍されるようお祈りしたい。

リーガの占領博物館と
“シベリア抑留”

白石仁章

(外務省大臣官房外交資料所)

天皇皇后両陛下が今年5月に初めてラトビアを訪問された。多くの新聞等に写真入りで詳しく紹介されたので、ご存じの方も多いと思うが、我が国におけるラトビアへの関心が高まり、理解が深まったことは嬉しい限りだ。それらの写真の中でも、特に印象に残ったのがリーガの占領博物館において、シベリアの収容所を再現した展示を両陛下が真剣な表情でご覧になっている写真だった。

同博物館は、ソ連による併合、ナチス・ドイツによる占領、そして1990年代まで続いたソ連の統治というラトビアにとっては悲惨極まりない

時代に関する様々な展示物を保管している。中でも特に目をひくのが、両陛下もご覧になった再現された収容所だ。同博物館を訪問し、再現された収容所の前に立ったとき、それまでに様々な書物や映画などにより多少知識を有していた多くの日本人が犠牲になった“シベリア抑留”を思い出し、ラトヴィア人の中にも同様の苦勞をしいられた人々がいたことに思いを馳せ、深い同情の念を禁じ得なかった。ソ連による併合の後、多くのラトヴィア人がシベリアに送られたことは知識としては知っていたが、極寒のシベリアでこのように粗末な収容所に入れられていたのかと思うと、第二次世界大戦末期に中国に進攻しソ連軍によって移送された日本人の“シベリア抑留”に負けず劣らず悲惨であったことが察せら

れた。

「是非、写真を撮りたい」と思ったが、それまでリーガの他の博物館では、写真を撮るには別料金(もちろん、大した金額ではないが)がかかるか、撮影お断りかのどちらかであった。また、係員は以前紹介した戦争博物館の親切な女性とは雰囲気が大部違い、髭面の気難しげな男性だった。恐る恐る「写真を撮って良いですか」と尋ねると、彼はキッと厳しい表情を向けてくるので、これは恐らく写真撮影は駄目だと言われるなど覚悟を決めた。ところが、彼の口からは全く予想外の言葉が飛び出した。真剣そのものの表情で「どうぞ、写真を撮ってくれ、これだけではなく、この博物館の展示品は全て写真を撮って良いから。是非、君の国の人達に我々の辛い歴史を伝え

て欲しい」と言うのだ。そして、写真撮らせて貰い、礼を言うともとても暖かい微笑みで応えてくれたのが印象的だった。

現在のリーガの街は、大変美しく平和そのもので、苦難の歴史を感じさせるものは少ない。しかし、ラトヴィアの人々の記憶には辛かった日々の思い出が今なお鮮明に残っていることを実感した出来事であった。

皆様もリーガに行かれた際には、是非ともこの占領博物館に足を伸ばし、第二次世界大戦の前後にラトヴィアの人々と日本人が共に味わった苦難の歴史に思いを馳せることによって、ラトヴィアの人々にある種の“共感”を覚えて頂ければと思う。

レソノ徳島公演、感動的成功収める

ラトビアの少女合唱団「レソノ」の日本公演は素晴らしい成功を収めた。民族衣装に身を包んだ彼女たちが歌うラトビア民謡の美しいメロディーと透明なハーモニーは、日本の聴衆の心に爽やかな風を吹き込んだ。音楽を通じた日本とラトビアの絆がまた強くなった。

一行は4月11日に来日、13日から4日間徳島に滞在して吉野川交流コンサート(14日)、文化の森交流演奏会(15日)で演奏。さらに19日に関西大学で合同演奏会に出演し20日帰国の途についた。

今回の訪日実現の背景に、ラトビア在住の黒沢歩さんの積極的な働きかけと、徳島の女声合唱団フラウリッヒ・ヴォカールの献身的な受け入れ・周到な準備があった。徳島滞在中の4日間、一行はホームステイして住民たちと心の交流を深めた。吉野川市長を表敬訪問して市役所ロビーで市民や職員の前で演奏したり、和



徳島で住民との交流を伝える徳島新聞(4月17日付け)

太鼓体験など日本の伝統に接したり…。メンバー一人一人が一生懸命に旅費を蓄えて実現した旅行に、彼女たちはかけがえのない思い出を残した。

今回のレソノ徳島公演にはヴァイヴァルス大使が特別メッセージを寄せ、大鵬薬品徳島工場がチケット購入で協力するなど多くの関係者が暖かく見守った。フラウリッヒ・ヴォカールの赤池嘉代代表から編集室に届いた手記を別掲する。

ヴァイヴァルス大使、新座R.Cで卓話

ラトビアの歴史・現状・魅力を伝える

ヴァイヴァルス駐日大使は4月5日、埼玉県新座ロータリークラブ・同新座こぶしロータリークラブの合同例会に招かれ、ラトビアの歴史・現状・魅力を40分間卓話した。当協会の加藤晴生専務理事、額原信二郎理事が同行した。

卓話要旨「ラトビアは北欧と西欧の架け橋でもあり、様々な国が利益を追求する場になっていたため、ドイツ、ポーランド、ロシアに長く占領され歴史がある。しかし1918年11月18日に独立を達成し、来年独立90周年を祝う。ただ、第2次大戦後、再びロシアの占領下に入った。シベリアへの強制送還などで占領前に80%を占めていたラトビア人の人口が52%まで落ち込んでしまった。85年から90年初めにかけて東西冷戦時代の結核が現実になり、再び独立を回復するチャンスを迎えた。様々な困難があったが、1991年独立回復宣言。

独立を宣言することは、経済建て直しという面で精神的に大きな恐怖が伴った。04年に念願のEU加盟を果たし、その後安全保障を強化するためNATOにも加盟した。国にとって極めて重要な決定だったが、5億人がかかっている市場経済にアクセスでき、物資・労働・金融の自由移動で恩恵を受け、安全が守られるようになった。さらに私たちは日本との二国関係を非常に重要視している。現在のテクノロジーやコミュニケーション技術を活用すれば決して遠い国ではない。日本には東欧、ロシア・サントペテルスブルグに新しく進出している企業が多い。ロシアに占領された国々に日本のビジネスを紹介したいと思われれば、ラト



卓話する大使

ラトビア少女合唱団「レソノ」をお迎えして

フラウリッヒ・ヴォカール
代表 赤池 喜代

去る4月13日～16日ラトビア少女合唱団『RESONO』を徳島にお迎えしました。4日間の滞在期間約20名の団員とその家族のみなさんは徳島市・吉野川市などにてホームステイ演奏会や交流会など私たちにかけがえのない思い出を残してくれました。

「ラブディエン!(こんにちは)」と、バスで徳島入りした彼女たちは長旅の疲れも見せずっこり! その可愛らしいこと! 16～23才の団員たちはみなおしゃべりで活動的、まずは徳島ならではの阿波踊りや和太鼓の演奏を楽しみました。翌日はそれぞれホストファミリーと鳴門のうずしおや協町、うだつの町並み観光に。我が家に泊まったオスカルス(ピアニスト、指揮者の息子さん)とは茶室にも出かけました。お抹茶の飲み方を教えてあげると上手にお茶碗をまわして飲んでいました。日本の伝統文化、体験できたでしょうか。

4月15日徳島市文化の森21世紀館に民族衣装に身を包んだ皆さんの美しい合唱が響きわたりました。かねてからの宣伝の効果が、2回行われた公演は立ち見が出るほどの盛況となりました。「リーガの鐘が鳴る」に始まったコンサートは「太陽の娘の嫁入り」「小鳥の運んできた知らせ」など軽快なリズム

や豊かなハーモニーにあふれていました。最後に「百万本のバラ」の原曲「マーラのくれた人生」がしっとり歌われると会場はひとつになり静かな感動が心を満たしました。演奏終了後も民族衣装の団員とあちこちで記念写真を撮ったり、握手したり、和やかな風景が見られました。彼女たちは徳島の人たちにしっかりとラトビアを印象づけたようです。

きっかけは1枚のCDでした。そのラトビアの合唱曲を何と私がたちで演奏したいと楽譜を探し、読み方を調べて…、それがラトビアの黒澤歩さん、そしてレソノの指揮者、指導者のイレーナとの出会いとなりました。一緒に声を合わせて歌った「赤とんぼ」そして「PUT VEJINI(風よそよげ)」、言葉を越えたそのハーモニー、つながり、感激しました。

今回の演奏会にメッセージをいただきましたヴァイヴァルス大使、ご協力いただきましたラトビア音楽協会の加藤晴生様、そしてレソノ来日にお力を尽くしてくださった黒澤歩様に心より感謝申し上げます。



聴衆の感動を呼んだ徳島演奏会

ビアは非常に友好的な国だと思う。EUと同様のサービスも提供できる。ビジネスは人と人の関係構築なしでは実現できない。大使館は人のつながりを構築し、日本とラトビアの関係を発展させることに取り組んでいる。具体的には、観光の面であったり、若者の交流であったり、文化の面であったり…。

ラトビアもコウノトリが有名で、EU諸国の中で最も数が多い。夏には

巣を作って子供を生んで育てる。その時はぜひラトビアに来てください。「ヨーコソ、ラトビア!」。

質疑応答の中で、自然の美しさについて問われた時「ラトビアの自然は非常に美しく、3000の湖と2000の川があります。国土の半分が緑に覆われている。40分という時間で全てお話しすることは無理で、40日あればもっとお話できます」とユーモラスに答え、笑い大きな拍手が起きた。

やながわ女声コーラス(福島)、ラトビアで演奏会

おなじみの板垣忠直氏が指導する福島のやながわ女声コーラス合唱団が、当協会にてケイコ・マクナマラさんとの出会いがきっかけになって、夢のラトビア演奏旅行が実現した。板垣氏から感動の手記が届いた。当協会の輪は着実に広がっている。

感動の国際交流

板垣忠直

やながわ女声コーラスのラトビア訪問団30名は、大きな感動と沢山の思い出を土産に、去る4月25日夕方、無事帰国いたしました。演奏はスウェーデン1回、ラトビア3回の計4回です。

寒冷前線通過中のリガは、バルトの冷たい風が吹きつける寒い日でしたが、最初の演奏会場ソサエター・オブ・リガの会場には、エドガー・ラジェプスキ氏の率いるRLBリガ・ナショナル・ヴィル・コーラス、日本から帰国したばかりの少女合唱団・レソノのメンバーのほか、ラトビア駐在大使館の久保代理大使、「木洩れ日のラトビア」の著者黒澤歩さんにもおいで頂き、暖かい雰囲気でお迎えいただきました。

「日の出する国・日本から、やながわ女声コーラスをお迎えして、コンサートを開催します。このコンサートが何時までも皆さんの心に残る演奏会になることを期待します」と主催者の挨拶。「この機会にラトビア・日本両国の交流がより深まることを期待します」と久保代理大使の挨拶のあと、演奏を開始しました。

演奏の初めに、私の指揮でラトビア国歌「Dievs SVETĪ Latvijā」を聴衆と共に合唱（混声四部）、ラジェプスキ氏の指揮、私のピアノで、ラトビアの合唱団と共に「君が代」を斉唱しました。

やながわ女声コーラスのレパートリーには、ラトビア曲はPut vejiniとDavaja Mayinaの2曲だけですが、どちらの曲も会場一杯の合唱になりました。特にPut vejiniは私の編曲で、途中で4度上に転調しましたが、会場の聴衆は即座に4度上のハーモニーで対応してくれたのは、予測もしない驚きでした。

この国の人々のハーモニー感の鋭さ、合唱を楽しむ心の豊かさを感じました。演奏会終了後の交流会も合唱とダンスで盛り上がり、熟年女性の合唱団もすっかり若返り、時を忘れての楽しい時間を過ごしました。

翌4月22日は朝8時30分にホテルを出発して、ラトビア第二の都市ダウガピルズに向いました。

リガから230キロメートル程の距



リガの会場で
左からケイコ・マクナマラさん、ラジェプスキ氏、筆者、同行の坂田マネージャー

離、バスで4時間程の距離、全く起伏のない平坦な道ですが、さすがに疲労を感じました。学校に着いてスーツケースを下ろし、控え室に入ってわずか30分での本番、移動のままの服装でステージに出ました。

若い女性の教育長が「皆さん、表を見て下さい。先ほどまで冷たい雨が降っていましたが、日の出する国・日本からの合唱団が太陽を運んできてくれました」と挨拶し、演奏に入りました。この町はロシア系の住民が多く、ラトビア語を話せない住民が沢山住んでいます。しかし国歌は全員が起立して、ラトビア語で歌いました。ここではロシアの民族衣装を身に着けたロシア系の女声コーラスが賛助出演し、ロシア民謡や民族舞踊を披露、「さくらさくら」と「ポーレシカポーレ」を合唱して学校での演奏を終わりました。さらに会場を音楽学校ホールに移し、合唱と日本舞踊「春の海」を披露、全員でラトビア人の心の歌Put vejiniを合唱して「日本文化の日」の行事を終了しました。

翌日は、ダウガピルズ市役所を表敬訪問、福島県伊達市長からのメッセージを渡し、伊達市長へのメッセージを頂いて、教育長・文化部長から同市の教育事情・歴史、文化活動についての説明を受けて帰りました。

この旅行には付録が付いたのです。それは、帰り、乗り継ぎの空港コペンハーゲンでのトラブルです。機材の都合で2時間遅れのフライトとのこと、さらに、「空港従業員のストライキのため、出発の見込みもたない…」とのコールです。狭い、しかも水もない暑い出発ロビーに1時間以上閉じ込められた搭乗客は、重苦しい雰囲気にもまれていました。ここで合唱でも歌って気分を変えてやろうと、即席コンサートを開催、1曲歌ったところロビーの雰囲気は

一転し、明るさが戻ったロビーはスタンディング・オーベーションとアンコールの嵐。Put vejiniを歌い終わったところで「間もなく搭乗可能…」とのコールがありました。

職員や乗客のお礼の言葉を聞きながら搭乗しました。

当初の目的は、『ラトビアの素晴らしい合唱を聴きに行こう』でしたが、思いもかけず演奏の機会が多くなり、ラトビアの影響も受けて素直な発声の合唱団に成長しました。20曲以上のレパートリーも全く想定外でした。

国際的はおろか日本国内でも全く無名の合唱団がコンサートを計画し、沢山の聴衆と音楽関係者にご来場頂



ラトビア国立放送合唱団と交歓
ソサエター・オブ・リガで

コンサートのプログラム
レソノのメンバーも賛助出演した

いたこと、主催者の皆様

に厚くお礼申し上げます。この旅行につきましては、ケイコ・マクナマラさんをはじめ、日本ラトビア音楽協会皆様、在日ラトビア大使館、駐ラトビア日本大使館の皆様にご多大なご支援を頂きました。厚くお礼申し上げます。



ラウマ・スクリデ ピアノリサイタル

7月12日(木) 19:00開演
浜離宮朝日ホール

ラトビア期待の星、ラウマ・スクリデが日本で初のピアノリサイタルを開きます。ラトビア大使館も後援し、ヴァイヴァルス大使から本紙に推薦文も届きました。

ラウマは、2001年のエリザベート王妃国際コンクールで優勝したヴァイオリニスト、パイバ・スクリデの実妹で、パイバのパートナーとして何度も来日していますが、ピアニストとして単独でリサイタルを開くのは今回が初めてです。

音楽評論家の間でも実力は姉より上という声もあり、当日NHKが収録を予定しています。3年間で15回の放送契約(TV・FM)したと聞いていますが、NHKがラウマの実力を高く評価している証でしょう。

5歳からピアノをはじめ、リガのエミルス・ダルツィンス音楽学校卒業。現在はハンブルグ国立音楽大学でフォルカー・バンフィールドのもとで研鑽中。近年はドイツ・ブランドブルク交響楽団のソリストとして活躍し、2005年にはニューヨークのリンカーンセンターでソロ・リサイタル・デビューを果たした。

【演奏曲目】

モーツァルト： Rondino 二長調 KV485
シューマン： フモレスケ 作品20
メンデルスゾーン＝ヘンゼル： 組曲「12ヶ月」より
リスト： 巡礼の年 第2年 イタリアより
ダンテを読んで～ソナタ 風幻想曲

※会員特別割引があります。お申し込みは「コンサートイマジジン」(03-3235-3777)へ。



ラトヴィアのミューズ、ラウマ・スクリデの日本デビューに寄せて。

ラトヴィアの若い才能の日本デビューをみなさまにお知らせできることを、心からうれしく思います。

ラウマさんは、クラシック音楽の最大手レコード会社である、ソニー&BMGの大きな期待を背負ってソロアルバムをリリースしました。まだ24歳の若さでCDとリサイタルのダブル・デビューを手中に収めた、大変な才能の持ち主です。

7月12日に浜離宮朝日ホールで行なわれるリサイタルは、ラウマさんの人生に一度しかない、日本でのデビュー・リサイタルになります。

彼女は、やがてラトヴィアを代表するピアニストになるでしょう。どうぞ、ラトヴィアのミューズ、そして未来の星のスタートを応援下さいませようお願い申し上げます。

ラトヴィア共和国大使館
特命全権大使
ペーテリス・ヴァイヴァルス

銀の狼を祖国ラトビアへ

川島泰彦

(日本ボーイスカウト富士地区国際委員長)

昨年8月1日付けLatvija紙に田中宇様「日本とラトビアの間にはボーイスカウトの最高章シルバーウルフを巡る不思議な友情の物語」について書いておられました。

今年8月、ラトビアのシルバーウルフは地球を一周し、70余年の旅を終えて祖国へ帰ろうとしています。歴史に翻弄されたウルフの旅とスカウター・ランジさんのことを、私の体験を交えて書いてみようと思います。

1968年、早稲田を卒業した私は、米国留学を希望しフルブライト大学院留学生試験を受けたが見事に失敗した。留学の夢は棄て難く、一人貨物船に乗り渡米、直接幾つかの大学と入学交渉してオレゴン州立大から許可を得た。当然の事ながら移民局から保証人を要求されたが、たった一人の私は全く当てもなく大いに悩んだ。偶然、知り合いの若者から紹介されたのがラトビア人、ラジンさんだった。64歳だったが姿勢がよく、品格ある紳士だった。話をするうち互いにスカウターであることを知り意気投合した。彼は誉りあるラトビア人であり、ラトビアスカウターだったからアメリカ市民権を持たなかった。それ故、他の人を私の保証人として推薦してくれた。

無事大学に入った私は機会ある度に彼の家を訪ね、音楽、文学、歴史、ラトビア事情など様々な事を学んだ。日本の文化、武士道にも興味を持ち語り合った。クリスマスも過ぎ、雪におおわれたシアトルの家々の窓にまだレコーションの灯が残った晩、私たちはスカウト運動について語り合っていた。彼は暖炉の上に置かれた箱からシルバーウルフ章を取り出して私に見せ、滅んだ祖国から持ち出せたのはこのウルフ章と、ほんの少しの私物だけだったと話した。私は感激と同時に彼への尊敬の念が一層高まるのを感じた。

2年間の留学を終えた私は日本へ帰った。ラジンさんは次の年、香港大学で教鞭を取られた帰途に来日し、私と京都、奈良などを見学して



1968年冬 ラジンさん宅で筆者(左)23歳、ラジン氏64歳だった

日本を楽しまれた。帰国後しばらくして彼の訃報を得た。翌年恩人へ礼を尽くすべく渡米し、夫人にお悔やみを申し上げた。その際夫人は彼の形見としてウルフ章を私の手に握らせた。以上が、私がウルフを預かるに至った物語である。

以来、日本には他に二つしか存在しない、わずか5.5センチの銀の狼は、私の机の引き出し奥深くに1974年以来住み付くことになった。時々ウルフを磨きながら、このウルフをどうしたらよいか悩んだ。

1989年、ベルリンの壁崩壊を機に東欧の共産国が次々と民主化し、1991年バルト三国も悲願の独立を果たした。勿論ラトビア共和国も独立し、蘇ったのである。そしてボーイスカウト・ラトビア連盟も再び設立された。

ウルフは1933年ラジンさんの手に渡り、ドイツ、英国、そして53年シアトルに落ち着き、74年、私と富士の麓にやってきた。70年以上世界を巡ったウルフは、祖国に帰りたいに違いない。祖国ラトビアではスカウトたちが待っている。ラジンさんの言葉が真実になった。

「ラトビアは必ず蘇る！」。

ラジンさんの愛国の象徴であるウルフ返還を決意し、その事を仲間に話すと、ウルフにみやげを持たせようということになった。富士のスカウトたちは今、募金活動に努力中である。

今年8月、ボーイスカウト運動は100周年を迎え、発祥の地英国で記念の世界ジャンボリーが、世界150カ国から4万人のスカウトを集めて開催される。その場でウルフ章の返還式が計画されている。私たちは返還式に臨み、その後リーガを訪問し、ラトビアのスカウトたちと交流する計画である。

私たちは世界を巡ったウルフ物語を日本の若者たちの交流事業に発展させたい。これからは、物語の主役を両国の若者たちに演じて欲しいと考えている。交流事業は日本ラトビア音楽協会の趣旨と全く同一であると信じている。入会させて頂いたことを心から感謝します。



外務大臣夫妻と懇談する筆者(6月10日・ラトビア大使館で)

ガルータ没後30年に思う

菊地康則

(ゼメネ音楽企画・日本ガルータ協会)

2003年12月23日、ラトビアが誇る大作曲家ルーツィヤ・ガルータのコンサート「主よ、あなたの大地は燃えている！」(Dievs, Tava zeme deg!)の日本初演を東京で行いました(キリスト品川教会)。その前年の6月、妻と共にラトビアを訪れ、リガ大聖堂で行われたこのコンサートの生演奏に奇しくも接し、心打たれてから約一年半後の夢の実現でした。「第九」や「メサイア」を歌うのが定番の時期に、意外にもたくさんの方が聴きに来ていただきました。

2002年の秋、このコンサートの演奏企画をラトビアの音楽関係者に伝えると、驚きの反応をもって、演奏会実現のための惜しまぬ協力が得られることとなりました。すぐさま演奏会場の確保に。パイプオルガンを備え、リーズナブルな料金で会場と楽器を貸してくれる施設を探しました。

このコンサートは、パイプオルガン、2名の独唱者(テノールとバリトン)と混声四部合唱という編成による、50分近い大作です。1943年、独ソ戦の最中に作曲され、翌年の初演後ただちに演奏禁止処分となった、女性作曲家ガルータの代表作で、ラトビアでは毎年歌われています。この曲でオルガンは伴奏の領域を超え、声楽と対等に位置する重要な役割を与えられています。以前より懇意にしていた友人の指揮者をはじめ、思いがけなく出会えた優秀なオルガニスト、学園祭での演奏が印象的で人づてにアプローチしたバリトン独唱者、急きょピンチヒッターとして出演を快諾してくれたテノール独唱者、そして何より以前からの知り合い・友人たちを中心としてさらに一般公募により結成したこのコンサートを歌うための合唱団、名づけて「コリス・ゼメネ」(イチゴ合唱団の意)のメンバーとの思い出深い日々がよみがえります。

2003年の初め、日刊紙「DIENA」の記者の方からインタビューを受け、まもなく大きな記事が同紙に掲載さ

れました。まだ企画段階でありながら、大きなインパクトをラトビアの人々に与えてしまったことに重責を感じつつ、私達夫婦は演奏会の実現に向けて走り出しました。

私は演奏会のプログラムに、「このコンサートのメッセージをみなさんと共有したい」と書きました。それは歌詞の内容のみならず、ガルータがこの音楽に込めた全人類に共通のメッセージを共有しましょう、という意味でした。言葉にしてはいませんが、私とそのメッセージをこの音楽から聴くことがなかったら、ラトビア人しか演奏しないと思われたこの作品の日本初演という発想すら浮かばなかったらと思います。

私の活動はそれで終わらず、ラトビアの友人達との出会いから新たに2005年の現代音楽コンサートの企画へと発展しました(9月23日、東京・武蔵野市民文化会館)。現役の作曲家を紹介する企画でしたが、あえてガルータの音楽を加えました。彼女の音楽は現代曲とはいえませんが、上演する機会を持ちたかったのです。

私が忘れてはならないと思っているのは、多くの人々の厚意と助力、激励があってこそこれらの演奏会は実現したのだということです。そしてもちろんガルータの力。ガルータが亡くなった1977年からちょうど30年。「主よ、あなたの大地は燃えている！」はもっと広く、世界中の人々によって歌われてもおかしくないコンサートです。つい昨年、そのドイツ初演を果たしたラフマニノフ合唱団がこの6月、リガに招かれて歌います。日本初演の私達も先だって同じようにラトビアに来て歌ってほしいという要請がありましたが、諸事情により辞退したことはまことに残念でした。プロ・アマを問わず、日本の合唱団のみならずにも是非、このコンサートの真髄に触れていただきたいと切に願っています。私たちの演奏会の録音がCDとなっておりますので、是非お問い合わせ下さい。

問い合わせ先：菊地康則

090-6018-8558 (携帯電話)

sauleszeme@jcom.home.ne.jp (電子メール)

「夏至の祭り」(Ligo)

LETA通信から、ラトビア人が一年のうちで最も待ち焦がれるLigo—「夏至の祭り」(6月23日夜)を祝う美しいカードが送られてきました。この頃になると祖国を離れて世界各国にいるラトビア人もこの祭りを祝います。日本でも在京ラトビア人が集まってお祝いしました。



バルト諸国への思い

社団法人 出版文化国際交流会
専務理事 石川 晴彦

日本・ラトビア音楽協会の加藤専務理事より会報になにか書くように依頼されたが、テーマ



は自由だという事なので現在の私の仕事の紹介も兼ねてバルトの国に対する思いを書いてみようと思う。

私は現在、社団法人出版文化国際交流会の専務理事を仰せつかっている。この団体の沿革を簡単に述べると、戦後間もない、1953年10月にいち早く将来の日本にとって国際交流の重要性を考えた出版界の先達により、アジア文化交流出版会として誕生し、1956年に出版文化国際交流会と改称、1961年に外務省所管の社団法人の認可を受けた当会は、2003年10月に創立50周年を迎えた。この間わが国出版物の海外普及促進を意図して、広く海外のブックフェアへの参加、日本図書展の開催、人物交流、海外日本文化研究機関等への図書寄贈を実施してきた。外務省（広報文化交流部）、独立行政法人国際交流基金（芸術交流部映像出版課）との連携のもと本会事業のはしらとも言うべき「国際ブックフェアへの参加事業」は2006年度12件実施した。

第32回ブエノスアイレス国際ブックフェア、第13回バタベスト国際ブックフェア、第9回ドミニカ共和国国際ブックフェア、第19回テヘラン国際ブックフェア、第3回テッサロニキ国際ブックフェア、第12回ソウル国際ブックフェア、第13回東京国際ブックフェア、第58回フランクフルト・ブックフェア、第51回ベオグラード国際ブックフェア、第20回グアダハラ国際ブックフェア、第8回ノン/フィクション国際ブックフェア（モスクワ）、第8回ヴィリニウス国際ブックフェアの12:件である。

今日では年間にして100件にも及ぶ国際ブックフェアが世界各地で開催されているが、多くの国から外務省あるいは在日各国大使館を通じて、日本の参加が強く要請されているが、本会の参加はそのごく一部にすぎない。

この中でフランクフルトは58回と歴史も古く世界最大規模を誇っており、当会は1961年より継続参加して

きた。またテッサロニキはギリシャ第二の都市だが参加したのは、今回が初めてである。このようにして毎年の年末までに在外公館からの稟請を基に地域的なバランスも考慮しながら次年度に参加するブックフェアを決めることは、困難だが極めて重要になってくる。

今から3年前新しく参加すべきブックフェアを検討した時にバルト三国が候補に上った。まだバルト三国について詳しい情報を持ち合わせておらず、加藤専務理事から招待して頂いたラトビアのジントルス合唱団の演奏会のことを思い出した。

早速加藤氏に連絡をとってラトビアについて調べ始めたが、まだ当時在日ラトビア大使館も設置されておらず、結果的にリトアニアのヴィリニウス国際ブックフェアに参加する事になった。

2005年から3年続けてヴィリニウス国際ブックフェアに参加する内にバルトの国々に対する理解と親しみも深まってきた今年、天皇皇后両陛下が初めてバルト三国をご訪問され、更に日本との交流が深まってゆくことは私達にとってもとても嬉しくまた幸せな事である。これからも本はものを言わぬ外交官と言われるが、図書展を通じて国際交流に努めていきたいと思う。日本・ラトビア音楽協会のますますのご発展をお祈りする。

隣りの好々爺

マークス寿子

(作家・秀明大教授・イギリス在住)

「トシ、早く下りてお出でよ。紹介したい人がいるから」。

大声で庭から私に呼びかけたのはカナダ人のデジ。私の住むロンドンのフラットの、庭に面した地階に住んでいてフラット責任者役も買って出ている女性だ。夏には週末ごとにパーベキュー・パーティをやってみなを招く。パーベキューもパーティも苦手な私はいつも口実を設けて断わるのだが、その夜はなぜか「今行くよ」と招待を受けた。

バルコニーを下りて行くと、すぐにキスとワインを与えられ、みんなの輪に迎え入れられた。「トシ、隣りに越してきたスラヴァ（ムスティスラフの愛称）だよ」と紹介されて、満面の笑みを浮かべている小柄な老



人の顔を見ると、何と20世紀最高のチェロの名手といわれるロストロポーヴィッチではないか。まさか！でも、確かだ。日本人の音楽ファンにとって、「スラヴァ」なんてとんでもない。ロストロポーヴィッチ様と呼びたいくらいだ。「ハロー」と手を出すと、彼は「日本人デスク」と日本語で訊いてきた。「そうです」と私。「私モ日本人デス。ツキジノオスシ、大好キデス」と彼。これが「隣りの好々爺」スラヴァとの出会いだった。20年も前のことである。当時のスラヴァはロンドンに亡命中。でも、世界中をたび回って演奏していて、NYにもパリにも、そしてロンドンにも住む所を持っていた。

私達のフラットは公園のような大きな共同庭園を持っていて、朝早く私が朝食の紅茶をいれている台所の窓から、スラヴァが若い友人と庭を歩いているのが見えたりした。私の家があるのはR通りの16番、隣りは18番。道の片側が奇数、反対側が偶数というのがイギリス式番地である。スラヴァは18番の地下と一階を続けて使っていて、壁は厳重な防音になっていると聞いた。そのせいか、世界的名手のチェロの音ももれてきたことは一度もなかった。その代り、これまた世界的名ソプラノの夫人の歌声は隣りと壁がぴったり接している私の書斎で何度か聴こえた。ペンの手を止めて聴きほれたものである。ロンドン交響楽団の指揮者に「チェロの音は聞こえないよ」と話したら、「ロストロポーヴィッチは練習なしの人だよ」と言われた。確かに、訃報のあと、オザワ率いるサイトウ・キネン・オーケストラとスラヴァの練習風景をテレビで見たが、あれはスラヴァの練習ではなく、彼がオザワとオーケストラを練習させている図だった。

その後、スラヴァはロシアの市民権を回復、91年のクーデター未遂事件でエリツィンと共に戦ったことを新聞で知った。そんなあとのある日曜日の朝、新聞を買いに行った帰りに、ちょうど隣家から出てきたスラヴァに出くわした。彼はいつもと全く変わらない好々爺振りで、にっこりして「オゲンキデスカ」と日本語で言ったのだった。

投稿

バルト三国—音楽に織り込まれる自然と人々の声

谷本 裕 (大阪在住)

前略 こんにちは。初めまして。

私は大阪・梅田の音楽ホール「ザ・フェニックスホール」で仕事しております、谷本と申します。私どもホールは、損保会社の社会貢献活動で営まれております。突然、ご連絡を差し上げ、恐縮です。本日は、私どもホールで6月末に行う、エストニアなどバルト三国にスポットを当てるコンサートにつきまして、PRのご協力をいただけないものかと考え、御連絡を差し上げました。公演は、私ども主催のレクチャーコンサートシリーズの一環でありまして、「バルト三国—音楽に織り込まれる自然と人々の声」というタイトルの舞台です。長年、この地域を研究しておられる志摩園子・昭和女子大学教授が、地域で盛んな合唱祭をはじめ、ラトヴィア出身のアルヴォ・ペルトやヴァスキスといった作曲家の作品を紹介します。演奏は、地元大阪の演奏家が担当します。フィンランドのシベリウスやデンマークのグリーグなど北欧の音楽を扱う公演は少なくありませんが、バルト地域の音楽を取り上げる試みは少ないと思います。それだけに公演周知には難渋しておりまして、こうした地域の音楽など文化全般、あるいは歴史に興味をお持ちの方々を知っていただく方策はないものか、と考え、インターネットを探すうち、ラトヴィアの音楽に興味をお持ちの方々がおいでの方の貴協会、そしてその会報の存在を知りました。本当に恐れ入りますが、ラトヴィア音楽協会の会報をご覧の皆様、こうしたコンサートの存在を呼び掛けてくださるなど、お力を賜れないかと願い、勝手ながら御連絡を差し上げた次第です。どうか、少しでもヒントをいただけますなら幸いに存じます。ご多忙のところ、誠に恐縮ではございますが、なにぞ宜しくお願い致します。

■オフィス■

〒530-0047 大阪市北区西天満 4-15-10

ザ・フェニックスホール企画事業担当

◇

投稿頂いたレクチャーコンサートは編集室も大きな関心を持ちました。が、本号は7月1日以降の発送のため、6月30日開催前の案内は不可能になりましたので投稿のみ掲載しました。詳しくはURLをご覧ください。

(編集室)

<http://phoenixhall.jp/>

yutaka.tanimoto@phoenixhall.jp

音楽情報 アラカルト

ヤーゼプス・ヴィートルス
について

久元 祐子 (ピアニスト)

ラトヴィアという合唱大国というイメージが強いのですが、器楽曲の分野でも優れた作品がたくさんあります。以前リガでリサイタルをさせていただきました折り、ラトヴィアの作曲家のピアノ作品を集めた楽譜をいただき、ときどき弾かせていただいております。

一昨年のリサイタルでは、ヴォルフガングス・ダルツィンス (1906～1962) のピアノ・ソナタ第2番を、日本初演として弾かせていただきましたし、「ノスタルジア」と題したCDには、メンドリス・パッシュの「想い出」を入れさせていただきました。

優れた音楽家を数多く輩出しているラトヴィアですが、私がかつとも好きな作曲家は、やはり、ヤーゼプス・ヴィートルス (1863-1948) です。5年前に東京で行ったリサイタルで、「ピアノのための10の変奏曲 作品6」を、日本初演として弾かせていただきましたところ、是非もう一度聴きたいという声が多く寄せられ、翌年再びリサイタルで弾かせていただきました。素朴でメランコリックな詩情、大地からわき起こってくるような情念、がっしりとしたヨーロッパ音楽の伝統と形式、そしてなによりもラトヴィアの歌心…。いろいろな魅力にあふれた名曲です。

今年の7月31日、上野の東京文化会館で予定しているリサイタルでは、ヴィートルスの、作品13の2、作品17の2の2曲の前奏曲、そして、作品29の7、作品32の5の2曲の「ラトヴィア民族の歌」を弾かせていただきます。どの曲も、独特のハーモニーとリズム感を持つ、珠玉の小品です。優れた作品を残しているヴィートルスですが、その生涯は必ずしも幸せなものではなかったようです。1944年、ソ連軍がラトヴィアに侵攻したときドイツに逃れ、まもなく失意のうちにリュベックで亡くなりました。しかし、ヴィートルスが、ラトヴィア音楽の発展に果たした大きな貢献とその作品のいのちは、永遠に音楽史に残ることを確信しています。

久元 祐子 ピアノ・リサイタル

7月21日 (土) 15:00 開演
長野県茅野市民館 (JR茅野駅前)
主催: アンダンテ・ファヴォリ



042-534-8860

後援: ラトヴィア共和国大使館 茅野市教育委員会

7月31日 (火) 19:00 開演
東京文化会館 (上野駅・公園口)

主催: プロアルテムジク

03-3943-6677

後援: ラトヴィア共和国大使館 日本ラトヴィア音楽協会 (社)日本ピアノ指導者協会

曲目

バッハ: ピアノ・ソナタ イ長調 作品17の5

モーツァルト: ピアノ・ソナタ イ短調KV310 同二長調KV311

ヴィートルス: 前奏曲 作品13の2 作品17の2

ヴィートルス: ラトヴィア民族の歌 作品29の7 作品32の5

ショパン: 幻想曲へ短調 作品49

若手サクソ奏者・
河西麻希さんがラトヴィアの
国際サクソ音楽祭出演

オープニングで合唱団「ラトヴィヤ」と共演

菊地康則 (ゼメネ音楽企画・
日本ガルータ協会)

2005年に私が「ゼメネ音楽企画」として行ったコンサート「現代ラトヴィアの音楽」は、日本の若い演奏家たちがそれまで未知の世界であったラトヴィアの音楽に挑戦し、それが決して日本の心に遠くないものであることを自身と聴衆に向けて実証した、意義あるイベントとなりました。

その出演者の一人、サクソフォ



ンの河西麻希さんは私の演奏会での現代曲演奏により、ラトヴィア音楽アカデミ

ー・サクソ科のアルティス・シーマニス教授の目をひくところとなり、教授は彼が音楽監督を務めるラトヴィアの国際サクソ音楽祭「サクソフォニア」に河西さんを招聘したいという旨を私に伝えてきました。サクソフォニア (SAXOPHONIA) は2年に一度、冬に行われる音楽祭で、今回の第5回音楽祭は本年2月13日～18日にかけて開催されました。

河西麻希さんは今回、ピアニストの石橋衣里さんとのデュオでラトヴィアを訪れました。プログラムは日本のサクソ作品 (豊住竜志: 風のこしたもの/ソナチネ/水の響きへの前奏曲、永嶋咲紀子: SPACE、野田僚: MAI、吉松隆: ファジイバード・ソナタ) を中心として、私の演奏会で彼女が日本初演したラトヴィアの作曲家ソルヴェイガ・サルガの「永遠の対話」、さらに私のリクエストによるルーツィヤ・ガルータの「ダイナ」「ルークシャナ」といった多彩な構成となりました。

河西さんは音楽祭のオープニングのために作曲された、リハルツ・ドゥブラの新作オラトリオのソリストに抜擢され、8人のサクソ奏者、混声合唱 (国立合唱団「ラトヴィヤ」)、打楽器、パイプオルガンとともに演奏しました (リガ・聖ヤーニス教会)。音楽があまりにも素晴らしく、「失神してしまいそうでした」とのこと。我等が女性デュオはリガをはじめマサラツァ、グルベネ、イアツァヴァといった小さな町でのリサイタルに出演し、各地で絶賛されました。また両名は作曲家ガルータが住んでいたアパートを訪れ、ガルータの音楽とその心に深く触れたようです。

2月14日のリガのリサイタルでの写真が日刊紙「DIENA」に大きく掲載されました。心のこもった熱い演奏に加え、出発前に用意してきたラトヴィア語の挨拶も好印象をあたえたようです。

今回のラトヴィアの旅で「一生分の親切をもらいました」という二人の感激の言葉が、今回裏方を務めた私への最高のプレゼントとなりました。

「百万本のバラ」とラトヴィア

小田陽子 (歌手)

私が「100万本のバラ」をキングレコードからリリースしたのは1984年のこと。日本語詞は岩谷時子さんに書いていただいた。ロシアの歌だとばかり思って長年歌ってきたこの歌のルーツがバルト三国のひとつ、ラトヴィア共和国であることを知り改めて探ってみることにした。

原曲はタイトルも歌詞も全く異なる「マールが与えた人生」であることは、このLatvia紙に既に詳しく報じられています。ラトヴィアの元文化大臣であり著名な音楽家でもあるライモンズ・パウルスが作曲したこの作品 (作詞: レオンス・ブリエディス) を、私なりに我が国でも知ってほしいし、さらに私が認識を新たにしたいラトヴィアの史実を伝えたいと思った。

押し寄せる弾圧の波に対してラトヴィアを含むバルト三国の一般市民たちは国境600キロにわたって、手に手を繋いだ人間の鎖を築き、一発の銃も撃たず抵抗した。そのとき彼らは銃の代わりに声を合わせて「歌」を歌い続けた…。1989年夏のこと。独立の一步手前だった。

当時の政情ではなかなか思うことを自由に言えなかった。思いをそっと歌に忍ばせて精神的な抵抗を続けたラトヴィア。この曲中に出てくる、娘に生命を与えたマールとは母親の象徴とされる女神。子宝を与えてくれるのもマールだ。「命はマールが与えてくれるものだけど、その後の幸せは自分で得るものだ」とこの歌は教えている。幾多の蹂躪に耐えてきた強くしなやかなラトヴィア共和国

の「国家の品格」なのかもしれない。私はラトヴィアに取材を兼ねて旅行にも行き、パウルスさんと面会して激励を受ける機会も得ました。そして昨年、一念発起して「マールが与えた人生」を日本語訳にしてCDを発売いたしました。

私にラトヴィアのことを細かく紐解かせ下さったのは、ペーテリス・ヴァイヴァルス大使、ラトヴィア在住の翻訳家・黒沢歩氏、このお二人をご紹介くださった北海道東川町ラトヴィア文化交流協会の西原義弘会長、松岡市郎東川町長らの方々でした。深くお礼申し上げます。今回さらに日本ラトヴィア音楽協会と新しいご縁ができたことに感謝している。

小田陽子のニューアルバム

「ROMANCER」2300円

※タイトルは彼女のオリジナル作品。初めて日本語で歌う「マールが与えた人生」(訳詞: 黒沢歩、小田陽子)、「100万本のバラ」やオリジナル曲など9曲収録。

申し込みは
TEL・FAX 03-3310-6015 (OFFICE ODA)



音楽情報 アラカルト

加藤登紀子コンサート2007

おなじみの加藤登紀子さんが、今年も精力的に全国ツアーを行っています。6月8日愛知県芸術劇場を皮切りに、9日神戸国際会館こくさいホール、19日札幌コンサートホールKitara、22・23日文化村オーチャードホール、29日秋田市文化会館、7月4日シアター・ドラマシティ（大阪）、14日川口リリア（埼玉）。オーチャードの2日間も超満員の盛況でした。客席に加藤晴生専務理事夫妻もいましたが、民子夫人に感動を綴ってもらいました。

感謝の拍手が会場いっぱい

加藤民子

会場内は元気な40代、50代、60代の男女でいっぱい埋め尽くされていました。まず第1ステージは登紀子さんが黒の可愛い衣裳に身を包んで出ていらして、おしゃべりな会話が始まりました。ほんとうに登紀子さんの舞台は歌も素晴らしいのですが、この会話に魅了されます。ウイットに富んだ、飾らない知識も豊富な曲目解説、それでいて決して押し付けがましくなく、サラッと話されるお話の仕方は本当にすばらしいものでした。

第1ステージはフランス料理でいえば前菜のようなものでした。色とりどりで何種類もの野菜や魚が入っていて、一曲一曲味わい深いものでした。中でもLemonという曲が私は好きで、昔庭にレモンの木がある家に住んでいた頃のことを懐かしく思い出しながら聴きました。

第2ステージは情熱的に歌い上げていらっしやいました。「愛のよろこび」「愛の讃歌」「さくらんぼの実る頃」「懐かしき恋人の歌」「愛しかない時」…、全てご自身の訳詞なので歌う詞（ことば）に思いがこもって私達の胸を打ちました。

第2ステージの最後、これで終曲ですとおっしゃって退場されても、お客様は誰一人立ち上がりず拍手が続いて、とうとう登紀子さんが真紅のブラウスでステージに走り出していらした時には、音楽の伴奏は「百万本のバラ」に変わっていて、その歌が始まりますと会場内の誰もが手を打ち拍子をとっているのです。ラトビアからやってきたこの曲を、皆が心から待っていて早く歌い始めてほしいと、ずっと拍手を続けていたんだなとわかり、胸がジーンとしてきました。

私達は合唱をやっている為、よくお互いに友人の合唱コンサートに行きますが、その時の拍手は複雑なメロディーをよく練習したねとか、ドイツ語やフランス語をよくマスターしたねとか、英語の歌詞をよく早く歌えるようになったねなど、その努力に対しての拍手が多いような気がします。登紀子さんのコンサートのお客様は自分の人生の大変だったこと、人間関係の煩わしさとか生きる上での苦しみ等を忘れさせてくれてありがとう、また愛のよろこび等を思い出させてくれてありがとうという感謝の拍手ではなかったかと思えました。

加藤登紀子 52枚目のオリジナルアルバム「シャントゥーズⅡ～野ばらの夢～」

5月9日発売 (UICZ-4169)
¥ 2800 (税込み)
藤井フミヤの書き下



ろし新曲「野ばらの夢」、ゴスペラーズ・村上てつやとのデュエット「ギターリズム」、新井満との出会いから録音することになった「千の風になって」を含む全14曲。

北村協一メモリアルコンサート

「アルペール・デュオーパ ミサ曲」原健之(上智大学グリークラブOB会)

昨年逝去された北村協一先生のメモリアルコンサートを開きます。合唱界に偉大な功績を残された北村先生の安らかな御魂の平安を祈念し、約40年間に亘り我々のクラブをご指導下さったことに対する感謝の気持ちを込めて、上智大学グリークラブOB会が、北村先生ご自身が深く愛され、又我々クラブ全員が愛してやまないアルペール・デュオーパのミサ曲全曲を演奏いたします。

ミサ曲の中でも名曲中の名曲と言われるこの作品が、合唱を愛する人々にあまねく永らく歌い継がれることを併せて祈念し、出来るだけ多くの方々にご来場下さいます様、ご案内、お願い申し上げます。

日時：07年10月8日（月・祝）

開演14時

場所：すみだトリフォニーホール大ホール

演奏：上智大学グリークラブ・OB

合唱団

演奏曲目：MESSE SOLENNELLE（荘厳ミサ）指揮：太田務

男声合唱組曲「柳河風俗詩」指揮：田中登志生

※当日は北村先生ゆかりの関西学院グリークラブOB東京新月会が賛助出演し、日本名歌集「[ノスタルジア]より」を演奏します（指揮：山田真也）

入場券：2500円（全席自由）

ご希望の方は下記宛ハガキかファックスでお申し込み下さい。

〒158-0083 世田谷区奥沢6-20-24 原 健之

FAX 03-3702-3760

ニューCDのご案内

北條陽子ピアノリサイタル・イン・リーガ「ラトヴィアの印象から」



06年9月10日、リーガの旧市内に建つマザー・ギルデのホールで行われたリ

サイタルのライブ録音。ラトヴィアの現代作曲家ゲオルクス・ペレーツィスの「ピアノ組曲4番」の他、ドゥシエク「ピアノソナタ」、ドビュッシー「前奏曲集」、ムソルグスキー「展覧会の絵」、中島はる「黒髪幻想曲」など、古典から近・現代に至るピアノの流れを掲示した。

ラトヴィア音楽アカデミー教授でもある作曲家G・ペレーツィスは「北條陽子さんは今日の数多い演奏家の中で輝かしく、そしてきめ細やかなピアニストです。彼女の芸術として特徴的なのは、確かで多面的な技術のうちに潜む真の普遍性であり、幅広い音楽様式の音域を保有していることです。そして、音楽のアイデアと形象の解釈は非常に的確なものでした。疑いなく、演奏家としてのキャリアを、今後とも成功させることでしょう」と評している。

発売07年4月1日

定価2100円 (PYAC-1001)

銀座・山野楽器店で重点販売されている。北條さんは3月19日、津田ホールで同じタイトルのリサイタルを開いて好評を博した。武蔵野音大・同専攻科卒。聖徳大講師。※渋谷のspaceCTCで開かれた川村ちかこさんの創作バッグ展示会BGMに北條さんのCDが流された。

(ラトビア便りブログから)

G・クレメール（バイオリン）&クレメラータ・パルティカ室内楽団

久し振りに聴いた素晴らしく良質なコンサート

ラトビアが誇るバイオリニスト、ギドン・クレメールが率いるクレメラータ・パルティカ室内楽団の日本公演最終演奏会が6月20日、東京オペラシティであった。メンバーは全員バルト三国の演奏家で、10年前に結成された20数人の若いユニークなグループ。

終始、クレメールの卓越した音楽性と音楽への愛がみなぎり、久し振りに聴いた最高に素晴らしい良質なコンサートだった。

この日のプログラムはマーラー、ショスタコーヴィッチ、カンチェリ、ピアソラの作品で構成され、ソロは殆んどクレメールが担当。マーラーの「交響曲10番より=アダージョ」は殆んどのメンバーが立って演奏し、会場を美しく優雅な響きで包み込んだ。カンチェリの「リトル・ダネリアーネ」はこのグループのために作られたもので本邦初演。

音楽評論家の大木正純氏は毎日新聞に「クレメールという稀有の音楽家の、溢れる好奇心と実験精神、そしてこだわりのない音楽への愛、クレメラータ・パルティカは一心同体となって彼の夢を叶える。」と記している。

大使、クレメールを公邸に招く

演奏会の前夜、ヴァイヴァルス大使はクレメール一行を公邸に招き団欒のひとときを過ごした。



公邸に招かれ記帳するクレメール



中庭で大使らと記念撮影

🎵 短信 🎵

ケイコ・マクナ马拉さんが6月1日夜、東京オペラシティホール（小ホール）で、ニューアルバム「Not Alone」発売を記念してコンサート「ジャズ、私の人生」を開いた（後援/スウェーデン大使館・ラトビア大使館）。アルバムのお問い合わせは(株)ティートックレコーズへ。

TEL 03-5789-5354

当協会の新プロジェクト「ラトビア語教室」上々のスタート

会場は大使館公邸

日本ラトビア音楽協会の新しいプロジェクト「ラトビア語教室」が6月27日、ラトビア大使館でスタートした。早々と予定した定員12名の応募があり、上々のスタートになった。講師は東京外国語大学在籍の堀口大樹さん（ロシア語専攻）、事務局担当は植木佐代さん。共に当協会会員。第1日は講師・受講生全員の自己紹介から和気あいあいの雰囲気であった。受講者は、ラトビアを旅行してその素晴らしさに感動した人、ラトビアの歌を正確に歌いたいという合唱団関係者、本格的にラトビア語を学びたいという学生さんなど多彩で、年齢的にも幅広いが素晴らしい一体感が生まれた。

講師の堀口さんは高校時代にラトビア語に関心を持ち、大学でロシア



語を学びながらほぼ独学でマスターした。指揮者交歓プロジェクトでアイラさんが来日した時は通訳として活躍し、今ではレセプションなどで見事な通訳役を務める貴重な会員。この日は自ら作成したテキストで、発音・アクセントの基本、挨拶・自己紹介の言葉などを分かりやすく指導し、すぐ受講者同士がラトビア語で挨拶を交わせるようになった。

今回の企画はヴァイヴァルス大使も大きな関心を示され、大使館後援ではなく、「共催」という形で全面的に支援をいただくことになった。所

用で少し遅れて大使館に戻られたが、受講生全員からいきなりラトビア語で“こんばんは、ヴァイヴァルスさん、お会いできてとても嬉しいです”と声をかけられ、一瞬、驚きの表情。すぐ快心の笑顔で“私もとても嬉しいです”と皆が分る言葉で応えた。

大使は「ラトビア語教室だから今日はラトビア語で挨拶します。インシアテプを取られた加藤さん、講師の堀口さん、準備に努力された方々、そして今日参加して頂いた皆さん、本当にありがとうございます。この素晴らしいプロジェクトに、大使館は会場スペースやテキストの提供など全面的にサポートします。毎回必ずラトビア人を参加させます。ラトビア語はヨーロッパの言葉の中でも難しいと言われますが、とても美しい言葉です。どうか最後まで頑張ってください。ラトビア人は1年を通じて最も待ち詫びる“夏至の祭り”（6月23日）を盛大に祝います。本国から美味しいチーズを取り寄せましたのでチャン

パンで乾杯しましょう。最後にもう一度、ラトビアに興味を持って頂いてありがとう」と教室オープニングスピーチ。これはもちろん、大使館員で日本語堪能のオレグスさんの通訳入り。この日は最初から発音レッスンに加わった。

大使館公邸で、大使や大使館員と膝を交えて勉強できるラトビア語教室。こんな贅沢な語学教室はめったにない。

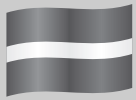
この日の状況は、ラトビア外務省のプレスリリースでラトビア中に伝えられた。日本ラトビア音楽協会とラトビア大使館共催と明記してあった。

教室は月2回（第2・4水曜日）、18時30分から20時まで。入会金3000円、1回1500円。ごく少人数は追加可能。詳細はラトビア語教室事務局へ。

【事務局】
植木佐代（TEL 03-3751-0134）
uekisayo@beige.ocn.ne.jp

暑中お見舞い申し上げます

<p>日本ラトビア音楽協会</p> <p>会長 藤井 威</p>	<p>(有)ケイ・エム・エス・コーポレーション</p> <p>代表取締役 山本 德行</p> <p>北九州市門司区西海岸1-2-18 TEL 093-322-1123 FAX 093-322-2525 E-mail consul-y@shive.ocn.ne.jp</p>	<p>平成ビジネスアソシエイツ株式会社</p> <p>加藤 晴生</p> <p>〒107-0052 東京都港区赤坂2-16-13 赤坂京ビル3階 TEL 03-3568-7227 FAX 03-3568-7229</p>
<p>岡地株式会社</p> <p>代表取締役社長 岡地 和道</p>	<p>朝日測量株式会社</p> <p>市川 土地家屋調査士 合同事務所 司法書士</p> <p>代表取締役 市川 貞夫</p>	<p>無垢材の家具と生活雑貨の店 業 業</p> <p>ラトビア製天然リネン100%の寝具を取り扱っています。快適な眠りをお届けします。</p> <p>〒158-0082 世田谷区等々力8-11-3 業 業 TEL 03-5760-7020 SUSU E-mail www.susu.co.jp 通信販売もいたしております。</p>
<p>日本ボーイスカウト 富士地区 国際委員長</p> <p>川島 泰彦</p> <p>〒417-0051 静岡県富士市吉原2-11-15 TEL 0545-52-4005 FAX 0545-52-4004 E-mail yas@yuaisports.com</p>	<p>福島県芸術文化団体連絡協議会 副会長 やながわ女声コーラス 指揮者 (合唱国ラトビアは素敵な国でした!)</p> <p>板垣 忠直</p> <p>〒960-0102 福島市鎌田字舟戸17 TEL 024-553-2745 FAX 024-554-0647 E-mail yanakyo@db.dion.ne.jp</p>	<p>東京ディズニーリゾート・オフィシャルホテル サンルートプラザ東京</p> <p>総支配人 迫 秀一郎</p> <p>〒279-0031 千葉県浦安市舞浜1-6 TEL 047-355-1111(代)</p>
<p>中小規模建築の設計・住宅性能評価 辻田建築事務所</p> <p>一級建築士 辻田 行男</p> <p>〒337-0051 さいたま市見沼区東大宮7-32-15 TEL & FAX 048-683-9530 E-mail happy-person@jcom.home.ne.jp</p>	<p>山本 健二</p> <p>〒277-0855 千葉県柏市南柏1-3-5-606 TEL 04-7147-9542</p>	<p>魚住コーラス「わかくさ」</p> <p>指揮者 嵯峨山まり子</p>
 <p>草月流師範</p> <p>石川 光翠</p> <p>〒190-0001 立川市若葉町2-43-23 E-mail ikeipepp@blum-net.ne.jp</p> <p>日黒パーシモンステージ</p>	<p>(有)華のハーモニー</p> <p>水谷 鏡子</p> <p>ラトビアは大好きな国です</p> <p>〒145-0071 大田区田園調布3-24-1</p>	<p>清水 光子</p> <p>〒185-0004 国分寺市新町3-6-3</p>
	<p>遠藤税理士事務所</p> <p>税理士 遠藤守正 (早稲田大学グリークラブ) 昭和37年卒</p> <p>〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 TEL 042-745-3334 FAX 042-740-4725 E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp (日本ラトビア音楽協会事務局)</p>	<p>日本柔道新聞社</p> <p>柔道新聞編集長 徳田 浩</p> <p>〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 TEL & FAX 03-3203-0363 E-mail htoku@paste.ocn.ne.jp 日本ラトビア音楽協会常務理事・Latvija編集長</p>



ラトビア 便り

リーガ在日本人の興味深いブログがあります。日本人の視点で見るラトビアとラトビア音楽事情が満載されています。最新情報の一部を抄録で紹介いたします。詳しくは

<http://Latvia-dyori.blogspot.com/>をご覧ください。

スイグルダでの「3B」コンサート

ヨーロッパでは夏になるとコンサートやオペラ、演劇はシーズンオフで、夏休みを利用して旅行する日本人には不満なのであるが、その代わりリゾート地でのフェスティバルなどの行事は行われている。日本でも人気の世界的バイオリニスト、ギドン・クレーメルはラトビア出身であるが、彼がバルト三国の若手弦楽器奏者を集めて結成した「クレメラータ・バルティカ」が、1週間ほどかけてリーガの東方のリゾート地、スイグルダでJubilateという名のフェスティバルを開いており、土曜日の演奏会に行ってきた。

クレーメル自身は世界を飛び回っているため、彼は不在で若手団員だけで公演することも多いようだが、今回はクレーメルも出演していた。会場はスイグルダの駅やバスターミナルから近い「白いグランドピアノ」という名の音楽施設で、変わった形の建物はグランドピアノをイメージしたのだろうか。私は初めて来たが、音楽学校なども併設されていてとて

も綺麗で、ホールは小ぢんまりとしている。私は1週間以上前に切符を予約したが、すでにほぼ満席で、当日は補助椅子をたくさん出していた。遠くからやってきて、満席ですと追い返すわけにも行かないし、リゾート地だからふらりとやってくる人もいて、みんな入ってしまったのだろう。日本では消防法などがうるさいのだろうが、こちらではおおらかである。私は右手後方の出入り口付近の席で、人の出入りが多くてどうにも落ち着かない場所だったが、何故か作曲家のマスカツ、ブラキディス、「クレメラータ・バルティカ」団長なども周囲に陣取っていた。マスカツ氏などは最初折りたたみのパイプ椅子に座っていて、あとでちゃんとした木の椅子に変えてもらっていた。ブラキディス氏は私の隣の隣に座っていた。

フェスティバルの一連のプログラムは「BBB」と総称し（これは通常の「バッハ、ベートーベン、ブラームス」ではなく、「ベートーベン、バルトーク、バルト三国」である！）演奏会ごとに替わる。（以下略）

夏至祭

ラトビア人にとって最も重要な年中行事は、夏至祭である。実際に最も日が長い日は毎年変わるが、この国では公休日が6月23、24日に固定されている。今年はちょうど土日に重なってしまい、振替休日というものがないため、みんな残念がっているかと思っただけで、それはそれで

楽しんでいただようである。だいたい、明けて25日（月）はまだ市内に人が少なく、閑散としている。

一週間前の16日（土）、リーガの中心部の運河の両岸にある公園で、前夜祭のようなものが行われた。地方からフォークロア・グループがやってきて、その地方の民族衣装をまとい、その地方の民謡を歌い（もちろんそれぞれの方言で）、自家製ビールや夏至祭用のチーズを振舞う。やはり民謡を聴くのが面白い。ラトビアは民謡の宝庫で、夏至祭で歌う歌を集めた本だけでも何冊も出ている。いつも思うことだが、こういうのを無料でやっていて、お金はどこから出るのだろうか気になる。でもまあいいか。地方の人というのは、なかなか余所者にうちとけずドライなリーガの人間と違い、人懐こくて私のような外国人にも話しかけてくる。（中略）

今年は6月21日が本当の夏至だったらしい。というわけで、リーガから電車で東方へ約1時間のスイグルダというリゾート地で、本格的に儀式を行なうところがあるということで、知人に誘われて行ってみた。夏至祭で面白いのは、リーガはもめけの殻となり、みんな地方へ散らばってしまうので、どこへ行っても必ず知人に会うのである。この日は平日なのでそうでもなかったが、それでも知人はやたら見かけだし、新たに友達も何人かできた。（以下略）

皇后陛下の御召し物

5月25日、天皇・皇后両陛下が欧州歴訪の一環として、ラトビアを訪問されたことは、日本のメディアで報道されていると思うので、ここでは、私はなるほどと気づいたが、おそらく誰もまだ取り上げていないであろうことを、ちょっと書いてみようと思う。

ご訪問の当日、現地のある朝刊紙に、前日のエストニア訪問時の写真が出ていた。場所は大統領宮殿である。皇后陛下の帽子は白の地に、青と黒のアクセントがあった（うまく表現できなくてすみません）。そのとき私は、「これはエストニアの国旗の色だな」と思った。しかし記事はそのことに触れておらず、単なる偶然かもしれないと思っていた。

ところが、ラトビアご訪問のニュースを、当日夕方のニュース番組で見ていると、ラトビア大統領官邸での皇后陛下の御召し物は、深紅と白で、ラトビアの国旗の色であった。そしてレポーターが、「皇后陛下の御召し物は、訪問国の国旗の色でデザインされている」という趣旨のことを言っていた。

翌26日はリトアニアだったのだが、現時点でまだ写真が見つからないのでわからない。

上に書いたことが本当なら、なかなか粋な計らいだと思う。もしこのことをご存じの方、皇室のことに詳しい方に、コメントをいただければ幸いです。

琥 珀

某日、加藤専務理事から「ラトビア語教室開設について相談したい」とメールが入った。こういう場合、いつも彼は「やるか、やらないか」の相談ではなく、すでに「絶対にやる」と決めている。高田馬場の喫茶室に集まったのは、加藤、遠藤専務理事、瀧原理事、講師予定の堀口大樹氏、事務局を依頼した植木佐代女史と私。案の定、いきなり具体的な相談が始まり1時間で全て決まった。こういう役割にうってつけの植木女史にキチッと根回しをしていた。それでも私の心には「短時間で受講者が集まるだろうか？」という一抹の不安があった▼6月25日。ラトビア大使館公邸で行われた第1回授業に、目標とした定員12名が見事に勢揃いした。全員が共通しているのはラトビア大好き人間ということ。別掲レポートの如く大成功で、1年

後には素晴らしい成果を予感させる充実した内容だった。講師の堀口氏の卓越した語学力と授業の進め方には感嘆の他ない。「専攻はロシア語。高校の時にラトビア語に関心を持ち、ほとんど独学で学んだ。あくまでロシア語勉強が主だったので実質的には6年ほど…。語学に弱い筆者の目には「天才」以外の何者でもない。恐らく、在日ラトビア人で一番日本語が上手い大使館のオルロフスさんと、絶妙のコンビで授業を進めるからこれは凄い。まさか初日から、全員がヴァイヴァルス大使とラトビア語で挨拶を交わせるとは思わなかった▼ラトビア語教室は想像以上にラトビアサイドが高い関心を示し、外務省のニュースリリースでラトビア中に流れた。このプロジェクトを推進した加藤専務に大使は深く感謝していた▼外務大臣が来日した時のセッションで、加藤専務にラトビア共和国から感謝状を贈呈された場面は感動的だった。日本ラトビア音楽

協会が存在と活動は今や本国でも高く評価されているが、プロジェクトの全ては彼の発想と強力な推進力によるもの。人望と信頼も高く、ロンドンから編集室に原稿をお寄せいただいたマークス寿子さんも、「帰ったら加藤さんのお祝いしましょうね」と付記されていた▼グリーククラブのマネージャーとして活躍した学生時代から、周到な根回しに裏付けされた、強引ともみえる推進力・馬力は定評があった。初の早慶合同演奏会では早稲田OBの森繁久彌氏からお祝いのメッセージを取り付け、第10回記念東西四大学合同演奏会場として、完成したばかりの東京文化会館柿落とし使用を実現した。当時の呼び名は「クマ」▼花形商社マンとなって世界を股に活躍した彼は、その後稲門グリーククラブ幹事長として群を抜く指導力を発揮する。数々の海外演奏旅行を実現し、その都度、訪問した国々の人たちと合唱を通じた草の根交流を推進した。彼がラトビ



「ラトビア語教室」初日の授業

アに魅せられたのは、1993年、同クラブのリーガ演奏会が最初だった。その後15回もこの国を訪問した▼日本ラトビア音楽協会は加藤専務の多彩な人生の集大成といっても過言ではない。それだけに彼の夢は果てしなく大きい。先ずは会員数を300名にしたいと、人に会うとまず勧誘する。彼のひたすらな思いが人の心を打つ。私自身も、彼から定期的にくる電話・メールに、かなりの難題でも、つい「分った、やっておくよ！」と応えてしまう。時には仕事より優先している自分に気がつく。（徳）

**Address by the President of Latvia, H.E. Vaira Vike-Freiberga,
at the Official Lunch in Honour of H.M. the Emperor Akihito
and H.M. the Empress Michiko of Japan,
Riga, May 25th, 2007
(25. 05. 2007)**

Your Majesty the Emperor;
Your Majesty the Empress;
Your Excellencies;
Ladies and gentlemen,

It is a great honour and a sincere pleasure to greet Your Majesty the Emperor Akihito and Your Majesty the Empress Michiko on your first visit to Latvia. Your Majesties, I am most delighted to have the opportunity to receive you on this historic occasion, the first ever visit of a Japanese Emperor and Empress to my country.

Cooperation between Latvia and Japan has a lengthy history and deeply rooted traditions. On January 10th, 1919, Japan became one of the first states to recognise our independence *de facto*, and on January 26th, 1921, Japan extended *de jure* recognition to our Republic. Japan was the only Asian country to open an Embassy in Latvia in the early years of our independence.

Though our countries are geographically distant from one another, Latvia and Japan have developed warm relations in the spheres of culture, education, and science. Latvian singers, dancers, and artists have visited Japan and Japanese singers have participated in Latvia's most significant cultural event, the national Song Festival that has been regularly held here since the 19th Century. The Latvian Academy of Music and three of our major choirs, Ave Sol, Dzintars, and the Latvian Radio Choir have established strong ties to Japan's musical community. Raimonds Pauls' song, "A Million Roses," has enjoyed remarkable popularity in Japan.

Latvia is grateful to Japan for the financial and technical assistance aiding the development of music in our country – to the Liepāja Symphonic Orchestra, our National Opera, and our National Symphonic Orchestra. Japan has also given support to the Latvian State Archive of Audiovisual Documents, the Museum of History, and the Riga School of Cultures. We value this assistance very highly.

Latvia has contributed to the development of hockey in Japan. Helmut Balderis, our great hockey champion, trained Japan's hockey players for four years, a process that many Latvians followed with interest and pride.

Latvians have long taken a keen interest in Japanese culture, art, and traditions. A secondary school in Riga has been popularising the Japanese language and culture since 1990, and over a hundred students are enrolled in the Asian studies programme at the University of Latvia. A Japanese-Latvian dictionary of the *kanji* was published last year.

I am pleased that people-to-people contacts between our countries flourish at different levels. Kobe became a sister city of our capital in 1974, stimulating ties in education and culture. In exchange for the young elephant Zuzi, Japan provided the Riga Zoo with a collection of cranes, a rarity in Europe. To our great joy we received another gift a few days ago: these Japanese cranes hatched chicks in our Zoo and they are now vigorously growing in sun.

Latvia and Japan marked the 15th anniversary of the restoration of diplomatic relations between us last year. The Republic of Latvia opened its Embassy in Tokyo and several high-level delegations exchanged visits. I am confident that the ties between our countries will grow stronger and more dynamic as a result.

I am glad to observe that many representatives of Latvia's business community have visited Japan in recent years. It is my hope that Japanese business will continue to take an interest in Latvia, too – now that Latvia is a Member State of the European Union, Riga has again become an important centre of trade and finance not only for the Baltic states but for all of northern Europe.

Latvians have always admired the work ethic and the persistence of the Japanese, qualities captured by your well-known saying, "fall down seven times, get up eight times." Latvians have a similar saying: "If you want to attain the possible, ask of yourself the impossible."

The Latvians and the Japanese share a reverence for nature that suffuses our ancient but still vital traditions – our approaches to space and the landscape diverge, but they both reflect this deeply rooted reverence. I am pleased to note that the famous Japanese monk and artist Shunmyo Masuno won a 2006 competition with his conception of the memorial to the victims of 20th-century totalitarianism to be created on Krievkalns Island in the Daugava River.

Your Majesties, your visit to Latvia is taking place just as the cherry trees have blossomed here – a time of bloom that takes place much earlier in your country, in March. It is my sincere wish that our relations will flower like the sakura.

I would like to propose a toast to you, Your Majesty the Emperor and Your Majesty the Empress – to your health and happiness, to the friendship between the Japanese people and the Latvian people, and to the further strengthening of the strong ties between our states!

情報断片

○…天皇后両陛下のラトビアご訪問に関して多くの方々から原稿をお寄せ頂き、どのメディアよりも中身の濃い内容になりました。ありがとうございました。フレイベルガ大統領の歓迎スピーチを読んでとても感動し、即座に英語のまま全文掲載しようと決意しました。両国の友好親善と相互理解を願う気持ちが格調高く語られています。これまでの音楽交流にも温かみに溢れる言葉で触れられています。

○…ラトビアの女声合唱団「レソノ」来日に伴う、徳島の皆さんの献身的な準備・心温まるもてなしや、福島のやながわ女声コーラスのラトビア演奏会成功・現地の歓迎ぶりなどの情報は、東京にいる私どもの気持ちも明るくしてくれました。本当に素晴らしい草の根交流でした。

○…当協会の新プロジェクト「ラトビア語教室」がスタートしました。当日は取材の立場で参加しましたが、語学が最も苦手の筆者も、「お早う」「今日は」「今晚は」「ありがとう」「私の名前はヒロシ・トクダです」「貴方のお名前は?」「とても嬉しい」などの会話や、「シャンパン」「雑誌」などの単語を覚えることができました。大使館公邸で、大使や大使館員とも対話しながら学べる語学教室なんてめったにありません。

○…大鵬薬品様が引き続き広告掲載を了承してくださいました。今号は安心して増ページできました。名刺広告とは別に、多くの会員から第3回指揮者交流プロジェクトへの寄付金が寄せられました。会員数も160名を突破しましたが、加藤晴生専務理事は「今が正念場」と気を引き締めています。

○…白井克彦早稲田大学総長(会員)と、おなじみのバイオリニスト・白井朝氏ご夫妻の息子・聡氏(日本学術新興会特別研究員)の新刊書評が7月1日付け朝日新聞に掲載されました。「未完のレーニン」(講談社選書メチエ・1575円)。評者は「振り出しにもどってレーニンを読む時代が訪れたらいい。新世代の開花度を占う標準木の感がある初仕事だ」と結んでいます。興味のある方は是非ご一読をお薦めします。

○…3年目の正念場にさしかかった当協会は、9月17日午後(月・敬老の日)に創立3周年記念レセプションを行います。詳細は後日の連絡になりますが、是非スケジュールを明けておいてください。(徳)

日本ラトビア音楽協会 会員名簿

(平成19年6月末現在)

※ の方々が新しい入会者です

Table with columns for (氏名), (県名), (所属等), and member details. Includes names like 小 山 雄 二, 大 阪 (財)啓明社 専務理事, and 野 村 壽 子, 東 京 (株)ネットワーク21. Lists various professions and affiliations across different prefectures.

名誉会員 1名 ※
個人会員 141名 内 ※ 20名
団体会員 8名 ※ 1
ラトビア国内会員 4名



私たちは人びとの健康を高め
心豊かな社会づくりに貢献します

 大鵬薬品

<http://www.taiho.co.jp/>